

熊本陸軍幼年学校におけるドイツ語教育

上村 直己（元熊本学園大学非常勤講師）

Der Deutschunterricht in der Kumamoto-Kadettenschule Von Naoki KAMIMURA

はじめに

熊本陸軍幼年学校におけるドイツ語教育については以前小文を草したことがあった。¹⁾しかし掲載誌が熊本大学の学報であったため簡単に過ぎて、十分論述できず不満が残っていた。加えてその後に新資料の入手もあったので新に稿を起こして、目下構想中の熊本独学史の 1 章にしたいと思うようになった。さて、熊本陸軍幼年学校は創立された明治 30 年から昭和 2 年に廃校になるまでのいわゆる城内時代と、昭和 14 年に復活し、同 20 年 8 月 15 日の終戦により 31 日を以て廃校になるまでの清水台時代の二つの時期に分かれる。本稿では重要と思われ城内時代を対象とするが、資料の関係で特に明治から大正初期へかけての熊幼のドイツ語教育を中心に考察し、その実体に迫りたい。

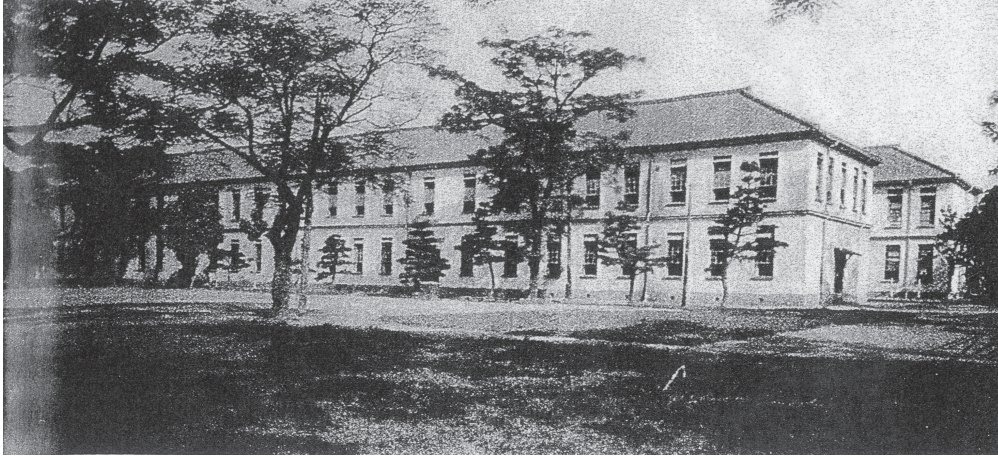
熊本陸軍地方幼年学校の設置

明治 29 年（1896）5 月 15 日陸軍地方幼年学校条令を發布して、明治の陸軍は、日清戦争直後に陸軍幼年学校を大幅に拡充して、地方幼年学校を全国六都市、即ち仙台、東京、名古屋、大阪、広島、熊本に開設し一期計 300 人を配布した。これらの都市は、当時の六師団の各師団司令部の所在地である。その主たる目的は堅実な徳操と、軍人精神を純粹培養するにあった。

熊本陸軍地方幼年学校（以下熊幼と略記）の熊本設置が決まったことに対して、明治 29 年 6 月発行『九州教育雑誌』第 52 号の「江湖漫録」欄掲載の「幼年学校」と題する文章では、それを喜びながらも同時に熊本が一層軍都化することに懸念を示している。

「幼年学校は將に明年を以て熊本に設置せられんとす、実に熊本の多幸と云ふべし、師団あり、将校あり、常に勲章目を奪ひ、劔佩耳を驚かす、而して今は亦幼年学校の設置を見んとす、熊本の青年は如何に之に刺撃せられ、之れに鼓動せらるべきぞ、吾人は恐る、熊本の青年を挙げて武人化し去らずんば止まざるを。」

だがともかく熊本に幼年学校の設置が決定し、熊本城の二の丸に置かれることになった。現在の監物台樹木園があるところである。



熊本陸軍幼年学校全景（城内）
（『熊本陸軍幼年学校史』平成10年）

沿革

ここで幼年学校令制定以後の熊幼の沿革を簡単に見ておこう。

- | | |
|------------|---|
| 明治29年5月 | 国軍に堅実な将校を養成する必要上、明治天皇の聖旨により特に幼年時代から特別教育を行うため陸軍地方幼年学校令が發布された。 |
| 明治30年5月 | 東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本の六箇所に陸軍地方幼年学校が設立された。熊本では熊本城二の丸（現在の監物台植物園）に置かれた。 |
| 明治30年9月 | 第一期生として初めて各学校に50名宛の生徒が入学。 |
| 明治34年2月 | 教育勅語を下賜。 |
| 明治35年2月 | 軍人勅諭を下賜。 |
| 明治36年7月 | 卒業優等生に皇太子殿下より賞品を下賜。 |
| 大正9年8月 | 幼年学校条例が改正され、陸軍地方幼年学校を陸軍幼年学校と改称。 |
| 昭和2年 | 軍縮により熊本陸軍幼年学校が廃止される。 |
| 昭和14年4月 | 熊本陸軍幼年学校の新校舎が熊本市清水台に復校する。 |
| 昭和20年8月31日 | 昭和20年8月15日大東亜戦争終戦と共に最終期の第49期生を以て伝統ある本校は解散した。 |

つまり熊幼が熊本城内に開校され第1期に入校したのが明治30年（1897）9月、そして昭和2年（1927）3月廃校までに1期～29期を送り出し、次いで12年間の空白期間をおいて、昭和14年（1939）4月清水台に復校し、以来終戦までの6年間に43期～49期の生徒が修学し、熊幼の生命は全体で36年に及んだ訳である。本稿で扱う対象ははじめに述べたように、城内時代の熊幼である。

目的と入試科目

さて、「陸軍地方幼年学校条例」によれば、開講目的について「本校ハ陸軍将校ニ出身志願ノ者ヲ選抜シ生徒トナシ軍事上ノ必要ヲ顧慮シテ普通学科ヲ教授シ軍人精神ヲ涵養シ陸軍中央幼年学校生徒トナルヘキ者ヲ養成スル所トス。陸軍中央幼年学校ハ陸軍地方幼年学校卒業者ヲ以テ生徒トシ地方幼年学校ニ連繁シテ士官候補生タルニ必要ナル普通学科及ビ軍人ノ予備教育ヲ為シ陸軍各兵科士官候補生トナスヘキ者ヲ養成スル所トス。」とある。

つまり士官候補生の養成を目的とする中央幼年学校を本科とすれば、地方幼年学校は予科である。入学定員 50 名。修業期間は 3 年、9 月開始の前期・後期から成っていた。入学時の年齢は 13 歳以上 15 歳以下と定められた。

地方幼年学校の入学試験の程度は中学 1 年級の終業の学力に比準して行われた。入試科目は次の通り。

読書：漢字交り文

作文：日用書類、漢字交り文、文法

習字：楷行

算術：初歩

地理：日本地理の概要

歴史：日本歴史の概要

理科：初歩

図画：鉛筆画

このほか、入学志願者の年齢は入学時に 13 才以上、15 才以下であることが要件とされた。

修得外国語について

陸幼の教育は訓育部と教授部とに分かれ、前者は文部教官が、後者は陸軍将校がそれぞれ担当した。教授部における普通科目として倫理、国漢文、外国語、歴史、輿地、数学があった。その中で注目されるのは修得外国語であった。外国語は仏、独、露の三国語があった。特に独仏語が重視された。

陸軍幼年学校において独語、仏語、露語を課す理由について「将校候補ニ要スル素要」(明治 30 年)²⁾に次のように記している。

尋常中学校ニ於ケル外国語学ハ英語ヲ以テ成規トセリ然ルニ陸軍軍事ノ講究ハ欧州強國中其陸軍ノ精鋭ヲ以テ鳴レル独逸仏蘭西ノ兵事材料ニ参照スル所最モ多ク又隣邦ノ語学ハ常ニ之ヲ講習シ不時ノ用ニ応セサル可ラス而シテ隣邦語学ハ其種類二三ニシテ足ラサルモ其最モ必要ナルハ支那及露西亜語トス東洋到ル処近來英語ノ用途モ亦頗ル多シト雖モ此語学ハ中学卒業者ヨリ採用セル候補生ノ既修スル者多キヲ以テ特ニ幼年学校ニ於テ教育スルノ必要ナシ且支那語ニ至テハ文字相同シキカ為メ士官学校ニ於テ初テ之ヲ教授スルヲ以テ遅シトセス故ニ幼年学校ニ於テ教授スヘキ語学ハ仏蘭西独逸及露西亜語ノ三ニシテ生徒ヲシテ必ス此一語学ヲ修メシムルヲ要ス而シテ軍事研究上最必要ナルハ仏独ノ語学ナリトス

軍事上の講究には欧州の軍事先進国であるフランスとドイツの兵事材料に参考になることが

最も多いのでフランス語とドイツ語を学ぶ必要がある。仮想敵国のロシアと中国の言葉も重要だが、中国語は文字が日本語と同じであるので士官学校において初めて学んでも遅くはない。近来アジアでは英語の用途も非常に多いが、英語は中学卒業より採用する候補生には既修する者が多いので、幼年学校では特に教育する必要がない。従って幼年学校では仏語、独語、露語のうち一つを修得させる必要があるが、軍事研究上に最重要なのは仏語、独語であるという。そして実際露語を置いたのは東京だけであって、その他の幼年学校では仏語と独語が置かれた。

だがこれとは別な見方もある。すなわち当時は三国干渉が強く印象に残っており、当事国であったロシア、フランス、ドイツの言葉を学んで忘れないようにしようとの意図で、幼年学校に復讐語として露・仏・独語を導入したのだとの説である。³⁾

語学の組分け

それでは入学した生徒をドイツ語の組とフランス語の組に分けるのはどのようにして行われたか。規則上は入学願書にそのいずれを希望するか記入して置くことになっていた。だが実際には仏語を選択する生徒より独語を選択する生徒の方が多かったようだ。例を示そう。後年の社会主義者大杉栄(1885～1923)は名古屋の幼年学校に入学し、ドイツ語を希望したが結局はフランス語の組に入れられた。その時の状況を次のように回想している。

東京の地方にはフランス語とドイツ語とがあった。が、その他の地方には、フランス語とドイツ語としかなかった。そして入学志願者は、その願書の中に、その中のどれか一つを希望語学として書き入れて置くのだった。

僕は、フランスはもう古い、これからは何でもドイツだというので、ドイツ語を選んだ。そして父を覚束ない先生にして、一ヶ月ばかりかかって、たしかヘステルの第一読本をあげていた。(中略)

が、学校にはいったその日の、第一番目の出来事は五十名の新生が撃剣場でせいの順で並ばされた事で、そして其の次ぎがそれに続いて直ぐ皆んなの語学を決定された事であった。希望者はフランス語よりもドイツ語の方が遙かに多かった。そして学校の方針それを公平に二分する事であった。即ち五十名の新生を二十五名づつそれぞれドイツ語とフランス語とに分けることであった。

「尤も、今までドイツ語をやってみたものは、希望通りドイツ語をやらせる。しかしそれは、単にアベチエを知ってゐるとか、エス・イスト何んかを知ってゐるとか云ふでは駄目だ。試験をする。」

せいの高い、胸とお尻のうんと張り出た、ドイツ士官のやうな大尉が、左の手を其のお尻の上に乗せ、(中略)其のエス・イスト何んかと云ふのを非常に流暢にやった。此のエス・イスト組は僕の外にも五、六人あったやうだった。(中略)

が、皆んな「試験をする」と云ふのおどかさされて黙って了った。そして其の大尉は、恐らくは気まぐれに、直ぐ其場でドイツ語とフランス語の二組をつくって了った。

僕の名はフランス語の方にあつた。僕はがっかりした。しかし、命令でさうきめられて了った以上は、もうどうともする事が出来なかった。それに、元來語学

の好きな僕はフランス語も直ぐに好きになった。そして、他の科目はすべて中学校でやった事の復習のやうなもので、僕は此のフランス語に全力を注いだ。⁴⁾

以上は名古屋陸幼の例だが、これに似た状況は熊幼など他の幼年学校でも見られたのではなからうか。当時の日本では医学や軍事だけでなく、法律・哲学・教育・文学など多くの分野でドイツの影響が強くなってきており、それに伴い、高等学校（旧制）でも英語と共にドイツ語が熱心に学ばれていたからである。それを反映して、例えば文部省派遣の留学生の大半がドイツを留学先に選んでいた。

こうした風潮は幼年学校生徒の独仏の語学選択に際しても影響を及ぼしたことは当然であろう。

教科書と教授法

ドイツ語の授業は（フランス語も同様だが）2年次の前期までは毎週6時間、2年次後期から3年次後期まで7時間実施された。3年間で実に合計744時間に達した。これは総ての科目中で最も多かった。幼年学校では語学がいかに重視されたかが分かる。

さて、筆者の手元には『熊本陸軍地方幼年学校一覽』（明治35年、大正2年及び同5年刊）の3冊がある。主としてこれらに資料によって課程と教科書を見てみよう。

最初の頃は簡単に次のように定められていた。

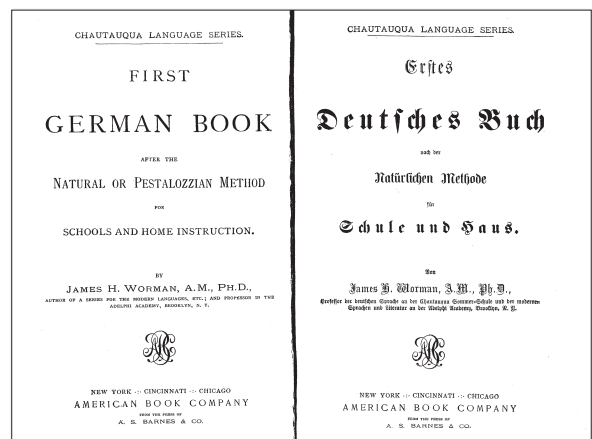
第1学年 前期「読方訳解文法作文書取会話習字」、後期「読方訳解文法作文書取会話」、第2学年前期以降は第3学年後期まですべて「同上」とあるだけで、あっさりしたものであった。

それが後には教科書なども指定されるようになった。

第1学年の前期では最初中央幼年学校編纂の五十音帖によってアルファベット、発音、綴り字を教え、その後ウォーマン（James H. Worman）⁵⁾ の *First German Book* を用いて読方、訳解、文法、会話、書取等を授け、更にドイツ文字とラテン文字の習字を課した。後期には *First German Book* を引き続き用い、それが終わると同じくウォーマンの *Second German Book* を使用した。

ウォーマンの *First German Book* は米国製で陸軍幼年学校の独語教科書として広く使われていた。

この書は副題に「自然的またはペスタロッチ的方法による」（After the Natural or Pestalozzian Method）とあるように、自然や動植物の絵入りの読章が収められていて、絵又は実物（写真）によって直接に外国語を教えるようになっていた。幼年学校生が学ぶに相応しい健全な教科書といってよい。Introduction の冒頭にいう。



陸幼の独語教科書
ウォーマンの *First German Book*

This **First German Book** is intended for beginners wishing to learn the spoken language of Germany. The special aim is to supply all that must be taught the pupil in order to enable him to understand and use the German. It is not a treatise on the language. There is just enough of grammar to suffice the need of the pupil.

なお、この本は Introduction だけが英文になっていて、本文はすべてドイツ文になっている。

2 学年の前期も 1 年次の後期と同様に *Second German Book* であった。後期からは大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎編の独文読本第二によって読み方、訳解等を教え、別にシェーフエル文典によって文法・作文等を教えたが、3 学年でも前期・後期とも同じ教科書を用いた。

大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎は明治期の代表的ゲルマニストで、3 人共著の『独逸文法教科書』は三太郎文法(典)として親しまれ旧制高等学校などで広く用いられた。3 人は読本も編み、独文読本はその一つ。ウォーマンの *Second German Book* より少し高度である。道徳的価値を有する事績を扱った詩文を収めている。熊幼生はこれによってドイツ語を学ぶと同時に徳性を涵養することができた。シェーフエル文典は、原タイトルを *Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache für die unteren Klassen höherer Lehranstalten* [高等学校下級クラス用のドイツ語授業便覧] といい、明治 10 年代 20 年代にかけて高等学校や私塾などで広く用いられたが、その後 30 年頃にはコンフォートの *German Course* を代表とする英文の文法教科書が高等学校などでお広く用いられていた。だが陸幼生は英語は未習だったので、なおもシェーフエル文典を用いたのであろう。

以上から熊幼では(他の陸幼でも同様だが)独語教科書は、ウォーマンの *First German Book*, *Second German Book* 以外は高等学校などで広く普及していたものを使用していたことが分かる。因みに、フランス語教育にもウォーマンの *First French Book* 及び *Second French Book* が用いられた。

教え方は読、訳、文法等の科目を分けずに 1 時間の中に一人の教師で成るだけ教えることになっていて、地方幼年学校の一学年では、最初に羅馬字を用いて日本風の五十音を凡そ十二時間で教了することにしてあり、その間に生徒は地名人名其他簡単な日本語を羅馬字で自由に綴ることの出来るようになっていた。

「地方幼年学校長へ与フル注意書」には授業に際して教師が注意すべき事項を列挙しているが、外国語に関して次の 1 項もあった。

「外国語中最初ノ教授ニ於テハ充分正確ノ発音ニ習ハシムルコト緊要ナリ我国中ニ現存セザル語音ハ殊ニ注意習熟セシメサル可ラズ」

陸幼の教育において発音は明瞭に発音することが求められた。それは外国語教育においても同様で、最初から十分正確な発音を習わせることが緊要だとされたのである。これは思うに、軍隊では命令等は正確に伝わるのが非常に大事なので、特に未来の将校を養成する幼年学校ではそれが重要視されたものであろう。

「教授は、普通に二十五人を一組として教授し、確實なる智識を収得し、応用の才を得しめんことを期す。試験も歴史、地理、理化、博物は学年試験を行ふも、その他の学科にありては、日常成績を俟するのみにて別に年末期末の試験を行ふことなし。」(陸軍地方幼年学校案内)⁶⁾ これによってドイツ語に関しては年末試験や期末試験はなく、平常点が重視されたことが分かる。

熊幼生の独作文

明治 32 年 4 月 25 日発行『独逸語学雑誌』(Zeitschrift für Deutsche Sprache) [精華書院] 第 7 号には熊幼生 2 人の独作文が掲載されている。これには、「下に掲ぐるものは在熊本陸軍地方幼年学校生徒米村及び是永二氏の作文なるが、同校は設立以来日尚ほ浅きにも拘らず生徒の

独乙語に於る進歩の著しきを見るに足るべし、本篇は素より誤謬少なからずといへども、聊か参考に資するの便あるを以て編者は毫も添削を加へず、こゝに之を掲ぐることゝせり、尚ほ此作文は兩篇共十頁に余れる長文なれども其一節を載す」という前書きがある。貴重な資料なので全文を引用しよう。

Es kommt jetzt der Winter, und es weht sehr kalt über das Schloß Kumamoto. Alle Bäume stehen ohne Laub und alle Berge sind mit weißen Schnee bedeckt. Es ist ja einsame Winterlandschaft. Am 21. Dezember haben wir schon unser Examen des ersten Semesters der zweiten Klasse vollendet. Nun dürfen wir Kadetten von dem nächsten Tage bis zum dritten Januar des folgenden Jahres fast freiwillig spielen, aber wir müssen sieben Tage lang von 28. nach dem Berg Aso marschieren, welcher berühmter Vulkan ist, während alle andere Schüler ganzea Neujahr mit allen Lüsten spielen.. Bei diesmaligem Marsch wurde ich vom Herrn Lehrer Kawamura befohlen, Journal zu schreiben. Darum habe ich es für die größte Ehre und werde mit dem größten Vergnügen nach der Feder greifen, obgleich ich in der deutschen Sprache noch ganz schwach bin.

Y. Yonemura.

Am dritten Januar. Das Wetter heute klar. Um halb acht Uhr machten wir auf Bein von hier, kamen nach Kumamoto zurück. Wie freuten wir uns darüber, als wir erst jetzt die Berge Tatsuda und Kinpo sahen, daß wir zu unserer Schule bald zurückkehren werden! Nach acht Tagen traten wir nun ins Thor der Schule voll Freude ein und jetzt im Vorhofe der Schule wurde unser Marschkorps aufgelöst.

Ich erinnere mich nun über diesmaligen Marsch: Die 100 Jünglinge, die mit einander in das Feld und den Berg von Aso durchgewandert waren, sahen den bekannten Vulkan, große Wasserfälle und Flüße, und besuchten sie manche Ruine, den heiligen Tempel. Wie groß wäre es, daß wir durch diesmaligen Marsch unsere Kenntniß vermehrten und unsere Gesundheit pflegten! Als wir zurückkamen und unsere Kleidungen der Reise auskleideten, blieben die Spur des Schweißes und Schlammunkte. Das werden wir als Erinnerungszeichen der langen Reise aufbewahren. Grüner Berg blieb noch in unserem Herzen, klares Wasser lief in die Brust über ; freies Gemüth und munteres Herz füllten in der Brust. Wir werden mit dem Herzen, das wir jetzt fallen ließen, wieder den Wissenschaften sich widmen.

Y. Korenaga.

Y. Yonemura. と Y. Korenaga とはそれぞれ米村靖雄、是永美治郎であろう。⁷⁾

前書きにもあるように、文法的な誤りももちろん少くないが、構文はしっかりしていて、内容もよく分かる文章になっている。熊本城のことや、立田山、金峰山、とくに阿蘇山に登ったときの思い出を語っているあたり、やはりウォーマンの教科書を用いての熊幼のドイツ語教育方針の影響だろう。とにかく熊幼のドイツ語教育が着実に効果を挙げていたことは確かである。なお、熊幼の卒業生の多くはさらに中央幼年学校において2年間ドイツ語の授業を受けたので、そこの卒業生は相当高度な語学力を身につけていたと判断してよいであろう。

ドイツ語担当教員のプロフィール

独語教員については、『熊幼会々員名簿』（昭和40年8月調製）及び『熊本陸軍幼年学校』に学校職員欄があり、教授部に総ての科目の教員が列記してあり、それによってドイツ語担当者全員の氏名を知ることができる。共に着任順になっていて、身分（教授・助教・嘱託）も記されている。『熊幼会々員名簿』には赴任の年月も記されている。だがこれらには誤記も見られる。⁸⁾ それについては注で指摘した。

職名	氏名	赴任年月
助教	松島 誠明	明 31. 6
教授	川室 圭吾	〃 31. 8
〃 ⁹⁾	桑野 礼治	〃 32. 8
嘱託	二宮 哲三	〃 34. 2
教授	中台 重躬	〃 37. 5
〃	斉藤 基	大 3. 10
嘱託	西沢 富則	〃 4. 10
〃	松岡 明	〃 4. 10
助教	今野 秀輔	〃 7. 3
嘱託	ヒューボッター	〃 11. 10
〃	ゲオルクH・ドル	〃 11. 10 ¹⁰⁾
〃	秋田 実	〃 12. 4
教授	磯山 健	〃 13. 3
嘱託	アンア・ドル	〃 14. 8

上記の2資料にはこれらの教員の経歴等については全く記載がない。ただ嘱託講師の場合本務校は五高教授であることが多く、その関係で現在五高記念館には履歴書が所蔵されており、それによってかなり詳しく知ることができる。

- ・松島誠明（生没年不詳）静岡の人。東大医学部予科¹¹⁾から旧東京外国語学校独語科を経て¹²⁾、明治28年独逸学協会学校専修科卒業。¹³⁾初代熊幼の独語教師（助教）であった。城内時代の熊幼で最も長く勤務した独語教師であった推定される。
- ・川室圭吾（?～1936）新潟県の人。東大医学部予科出身¹⁴⁾の独語学者で、熊幼の教授を務めたが、後には中央幼年学校へ転任になった。『学生必携独和教場会話』（明治37年）や読本 *Freund in Sommerferien*（同42年）。初期の陸軍幼年学校のドイツ語教育で最も功績のあった人である。昭和11年8月30日死去。
- ・桑野礼治（1872～1912）明治5年京都生まれ。新潟県士族。東京浅草濠西精舎で3年間漢学を修めた後、明治21年東京本郷独逸語学校に入学、3年間独語と普通学を修めた。さらに神田の大成学館で中国語やフランス語を学んだ。明治25年には独逸学協会学校に入学、2年間独語を修めた。その後第一高等学校に入り独語、仏語を学んだが、直ぐに退学し、理科大学内の人類学講習会に入り坪井正五郎につき人類学、土俗学等を学んだ。その後東京帝国大学附属図書館に勤めたが、明治32年8月熊本陸軍地方幼年の嘱託教授となり1年務めた。その後は第六師団の通訳に従



桑野礼治（前列中央）

事していたが、明治39年8月に至り、第五高等学校教授に任ぜられた。異色ある教授として知られ、『龍南会雑誌』にも度々寄稿した。明治45年8月夏期休暇中、広島県忠海町の海岸で海水浴中に脳貧血を起し溺死した。¹⁵⁾

- ・二宮哲三（1870～？）明治3年福島生まれ。明治26年7月独逸学協会学校卒業。一年志願兵役に服し、日清戦争には近衛師団より出征。召集解除後内務省に任官。明治30年五高ドイツ語講師、のち教授に就任。この間熊幼の嘱託として独語を担当した。40年県立福島中学校長に栄転。同年7月周囲に推されて初代福島市長に就任。以来、大正14年8月の退任まで、19年間にわたり同市の発展に尽くした。著書に『独逸文典原理』（精華書院、明43）がある。



二宮哲三

- ・中台重躬（なかだい・しげみ）（生没年不詳）最初長崎の第五高等学校医学部の嘱託講師のち助教授としてドイツ語を担当していたが、川室の後任として熊幼に迎えられた。著作に『独逸作文早分かり』（六合館、明治33年）という入門書がある。奥付によると、この本を出した頃は「東京市本郷区本郷4丁目39番地」に住んでいた。明治40年9月から大正3年8月まで私立熊本医学専門学校の講師としてドイツ語を担当した。¹⁶⁾ 森鷗外の日記には中台の名前がしばしば登場するので、二人は交友があったらしい。



中台重躬

- ・斎藤 基（生没年不詳）旧姓伊東。東京本郷台町の独逸学校を経て旧東京外国語学校中退。著作に『袖珍独和医薬会話』（明31）、『独逸語必携』第1輯、安田登共著（同38）、『薬物主治用量』（大11）などがある。
- ・西沢富則（1885～？）明治18年12月14日長野県生まれ。第一高等学校を経て、明治39年東京文科大学独逸文学科卒。七高造士館教授を経て大正3年五高教授となる。

- ・松岡 明（嘱託、大4・10）不詳。
- ・今野秀輔（助教、大7・3）経歴不詳。『大いなる熊本陸軍幼年学校』に「独語の今野秀輔教官は小さくてやせて云々」とある。同書243頁。

- ・ヒューボッター Franz Hübotter（1881～1967）ワイマール生まれ。少年時代から外国語に興味を持ち、ヘブライ語、ポーランド語、中国語を学んだ。大学では医学を専攻し、やがてベルリン大学で医学史それも東洋医学史を担当するようになった。1921年五高のドイツ語教師として招聘に応じて来日したのは、それを機会に東洋医学史に関する資料を収集するためでもあった。1925年五高教師を解備以後は中国で医師として働いた。1953年ドイツに帰国。ベルリンで漢方医を開業、大学では特任教授として医学史を講義した。1967年ベルリンにおいて死去。¹⁷⁾



ヒューボッター

・ゲオルク H・ドル Georg Hans Doll. (1882~1967) ドイツ・バーデン州エッピンゲンに生まれた。ハイデルベルクのギムナジウムで3年間学び、次いで1900年よりミュンヘン大学で獣医学を研究したが、家庭の都合で中止。1906年より12年までベルリンの出版社に勤務。13年ベルリンのベールリッツ語学校に転じ、同校にて独語教師や校長代理を務めた。その後兵役に勤務し、第一次大戦には予備将校として参戦し、且つ表彰された。大正14年(1925)5月五高の独語講師に雇い入れられた。五高では月報425円を支給され黒髪の五高外人官舎に住んだ。この頃熊幼の嘱託講師となったと推定される。昭和5年能についての論文及び「鉢木」の翻訳によってブリュセル大学より博士号を授与された。その後一旦帰国したが、昭和9年再び来日し、五高外国人教師となり、昭和20年9月30日解傭となるまで五高最後の外国人教師として五高職員・学生と共に戦争の過酷な時期と敗戦を体験した。この間昭和16年3月から熊幼で英語を教え、妻のアンアもドイツ語を教えた。五高生にはドル先生として長く親しまれた。¹⁸⁾戦後は故郷エッピンゲンに帰り市民大学(Volkshochschule)の教頭を務め、日本や日本人について多くの講義を行った。晩年はフランクフルトの北方タウヌス山地のファルケンシュタインにある老人の家に夫妻で住んだ。1967年12月23日死去。85才であった。



ゲオルク H・ドル

- ・秋田 実(1887~?) 明治20年7月9日鳥根県生まれ。七高造士館を経て、明治45年東京文科大学独逸文学科卒。大正8年1月五高教授に任ぜらる。大正12年4月熊幼の独語授業を委嘱され、翌年3月解嘱。昭和2年文部省より独語研究のため1年半独国に留学を命じられた。同17年8月熊本薬学専門学校教授に任命された。
- ・磯山 健(1879~1965) 明治12年6月東京神田生まれ。東京英語学校、私立日本中学校を経て、明治30年東京外国語学校独語科入学。34年7月同校卒業。同8月五高独語教授嘱託。37年12月依願嘱託を解かれ、仙台陸軍地方幼年学校教授に就任。¹⁹⁾大正13年3月に至り熊幼教授に転任。
- ・アンア・ドル Anna Doll (生没年不詳) ハンス・ドル夫人。
- ・松岡明、今野秀輔については資料がなく経歴等不明である。

あとがき

これらの教師に導かれながら、純粹で、凜々しい熊幼生たちが熱心にアー、ベー、ツェーを唱えていた姿はいじらしく、また尊い。それだけでなく、熊幼生が書いた独作文を見ても分かるように着実にその成果は上がっていたと判断される。終わりに、熊幼で習得したドイツ語がその後の人生に大きな影響を与えた例を二つあげておきたい。その一例は後年ドイツ文学の研究者・翻訳家として活躍した中島清（1883～1966）の場合である。佐賀県生まれの彼は、佐賀尋常中学を中退し、明治32年9月、熊幼の第3期生として入学し、初めてドイツ語を学んだ。その時の師は川室圭吾と松島誠明であったであろう。だが彼はここも2年後に退学し、さらに本格的にドイツ語を学ぶために上京し独逸語専修学校に入学した。その後はドイツ文学の翻訳や著述によって生きていった。大学出でなかったために外面的には苦勞し放浪生活を送った時期もあったが、晩年は北大の講師を務めた。²⁰⁾ 現在では中島清は殆ど忘れられているが、日本の独文学研究史が書かれることがあれば彼の名は決して逸せられないことは確かである。

もう一つは『熊幼会報』（昭和52年版）に「熊幼と私のドイツ語」を寄稿した長友次男（第11期）の場合である。²¹⁾ この中で長友は、熊幼時代に教わった科目中で一番強く彼の行方に影響を与えたのはドイツ語であったと述べ、成績は他の科目は中程度であったが、ドイツ語だけは優れていて卒業時には余り辞書に頼らずに原書が読め、ドイツ人との会話もスムーズであったこと、大正7～8年のシベリア出兵時にはドイツ語と片言交じりのロシア語を操って、敵情を探知することができ、金鶏功5級を授与され、ドイツ語が行く手に曙光を認めさせた第一歩であったことなど6項目に亘ってドイツ語との深い関わりを語っている。その中には憲兵であった長友は終戦直後米人俘虜虐待の疑いで巣鴨プリズンに収容され、死を覚悟していたが、熊幼のドイツ語が死刑の13階段の手前で救ってくれたとまで書いている。そして結論的に長友は、「熊幼時代に松島教官から教えられたあの『日本式ドイツ語』が、いつの間にか芽を出し、花を開き、実を結んだ」と述べている。

これら二人の場合は極端だとしても、ほかの熊幼生たちもドイツ語に関して多かれ少なかれ似たような経験があったのではあるまいか。

熊幼に限らず一般的に陸軍幼年学校のドイツ語教育は、語学教育としては成功したと言えよう。またそれはわが国のドイツ語教育史に特異な位置を占めている。だが軍事史家も指摘するように、問題も内在していた。²²⁾ 初期の陸幼で課した外国語は独・仏・露の3カ国語で、英語と中国語は中学校から士官学校へ入った者が専ら修得した。他方、軍事研究のために留学した将校の中では幼年学校出身者が多数を占めた（例えば長友は前記「熊幼と私のドイツ語」において11期生のうち中将が3人、少将が7人いた述べている。）そして独仏ソ留学将校は帰国後多く重要な地位に就いたが、米英留学組にはそれが少なかった。これが結局、陸軍上層部の対米英認識を貧弱なものにした主要な原因となった。



「熊本陸軍幼年学校跡」の碑（監物台樹木園）と筆者（2015. 9. 27 撮影）

註

- 1) 拙稿「熊幼のドイツ語教育」は平成10年4月から16年3月まで『熊本大学学報』に「九州の日独文化誌」と題して72回にわたり連載した小考の一編であり、のち拙著『九州の日独文化交流人物誌』（熊本大学文学部地域科学科、平成16年3月、訂正第2版同17年2月）に収録された。
- 2) 『陸軍教育史 明治別記第十一巻 陸軍中央・地方幼年学校』（防衛研究所図書室蔵）。
- 3) 『熊本陸軍幼年学校』（平成10年）にも同様な説を紹介している。108及び132頁。
- 4) 大杉栄『自叙伝』復刻版（長崎出版、1979）104～106頁。
- 5) Worman, James Henry (1835-1930) アメリカの言語学者。ドイツ語、フランス語、スペイン語などの各種の文法書や読本を編纂し世に送ったことで知られる。
- 6) 『国士』第53号（明治36年2月）。
- 7) 『熊本陸軍地方幼年学校一覧』（大正2年）の「卒業生徒人名」による。
- 8) 『熊幼会々員名簿』は筆者が参照した昭和40年版のほかにもその後2冊発行されており、いずれも熊本県立図書館に所蔵されている。それにより訂正されているかどうかを確認しようとしたが、個人情報保護法のために閲覧できなかったのは遺憾である。
- 9) 『熊幼会々員名簿』（昭和40年8月調製）や『熊本陸軍幼年学校』（平成10年）においては桑野の肩書きを「教授」としているがこれは厳密には「嘱託教授」とすべきであろう。桑野は履歴書（五高記念館蔵）によると、明治32年8月19日付で「熊本陸軍地方幼年学校独逸語学嘱託教授」に任ぜられ、月給30円を支給された。当時熊幼のドイツ語教授のポストは1名であり、それは川室圭吾が占めていたので、学校当局としては桑野を「嘱託教授」にして教授の仕事させていたと思われる。
- 10) ドルが五高の傭外国人教師となったのは大正14年（1925）五月であるから、大正11年10月の時点ではまだ来日しておらず、明らかに誤記である。
- 11) 明治10年刊『東京大学医学部一覧』に「医学予備第二級生」として松島の名がある。100頁。
- 12) 『東京外国語学校一覧』（明治13・14年）198頁。
- 13) 『独逸学協会学校五十年史』（昭和8年）所収の「独協同窓会々員名簿」による。同書5頁。
- 14) 『東京大学医学部一覧』（明治13・14）に「医学四等予科甲生」として、同一覧（明治14・15）に「予科二等生徒」としてそれぞれ川室の名がある。
- 15) 桑野について詳しくは拙稿「『習慣教育法』訳者桑野礼治」（『九州の日独文化交流人物誌』所収）を参照されたい。
- 16) 山崎正董『肥後医育史』642頁。
- 17) ヒューボッター について詳しくは、拙稿「第五高等学校外国人教師履歴」（『九州の日独文化交流人物誌』）及び拙稿「東洋医史学者フランツ・ヒューボッター博士」（『日本古書通信』第695号、昭和62年8月）を参照されたい。
- 18) G・H・ドル について詳しくは、拙稿「第五高等学校外国人教師履歴」（『九州の日独文化交流人物誌』）及び拙稿「熊本の日独交流人物誌」（『熊本の日独交流 一創立45周年記念誌』熊本日独協会、2007）参照されたい。
- 19) 仙台陸軍幼年学校時代の磯山については次のような評がある。「ドイツ語の磯山健教官は、乙にすました発音をして、生徒間に評判になっていたが、極めて教育に熱心で、休日ごとに語学の劣等生を自宅に招いて補習を行い、また優秀者数名を時々集めて、課外のドイツ語を特別に講義された。」（『山紫に水清き 仙台陸軍幼年学校史』昭和48年）246頁。

20) 中島清について詳しくは拙稿「ドイツ文学翻訳家中島 清」(『九州の日独文化交流人物誌』)及び山崎義彦「幻のゲルマニスト」(『ラテルネ』第29号、1973)を参照されたい。

21) 長友次男(1893～1986)宮崎県生まれ。熊幼を経て、1914年陸軍士官学校を卒業(26期)。陸軍少尉、憲兵一筋。陸軍少将。戦後、A級戦犯として逮捕された。

22) 例えば林三郎は「太平洋戦争陸戦概史」においてこう述べている。

「幼年学校の教育については、外国語に問題があった。その昔、幼年学校で教育した外国語は、独、仏、露の三か国語で、英語および華語は中学校から士官学校に入った者が専ら修得した。一方、軍事研究のために外国に派遣された将校の中には、陸軍大学校卒業時の成績序列の関係から、幼年校出身者がはるかに多かった。そのような経緯から、独仏ソ留学将校は帰国後多く重要な地位に就いたが、米英留学将校にはそれが少なかった。そしてこのことが結局、陸軍中枢部の対米英認識を貧弱にした有力な原因となったのである。」(『大坂陸軍幼年学校史』89頁)。

松下芳男も『山紫に水清き 仙台陸軍幼年学校史』(昭和48年)において同様な意見を述べている。同書38頁。

[附記]

熊幼(城内)の独語教育に貢献することの最も多かった川室圭吾と松島誠明の肖像写真をお持ちの方は、ぜひ御一報下さるようお願いします。